

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業
・国際交流拠点形成事業)

1. 館の使命と本事業の関係

事業名：永遠に残したい鳴門の海を
伝統のフレスコ画法で描く

事業者名：大塚国際美術館

住所：徳島県鳴門市鳴門町土佐泊浦字福池 6 5 - 1

TEL：088-687-3737

FAX：088-687-1117

HPアドレス：<http://www.o-museum.or.jp/>

連携事業者名：鳴門市内中学校、鳴門教育大学附属中学校、
鳴門市美術協会、大塚国際美術館 ボランティア会

会場：大塚国際美術館

事業期間：平成21年6月5日～平成22年1月31日



大塚国際美術館 正面玄関

世界25ヶ国190余りの国々の絵画を陶板で原寸大に再現、展示し、日本では見ることができない建築物の作品を空間ごと体感できる美術館である。そこで、建物に描かれることが多いフレスコ画の展示を鑑賞し、美術館で実際に制作することが出来るワークショップを開発することで、よりフレスコ画法についての理解を深める場の提供に努めた。

2. 企画内容

①事業目的

古代遺跡や教会などのフレスコ画を環境空間ごと再現した当館の展示を活かして、美術館で中学生がフレスコ画を鑑賞し、画法を実際に体験することが出来るワークショップを、研究・開発することを目的とする。美術館が主体となり、地元中学校の教員、専門家と連携することで、より生徒に適したワークショップ作りを目指した。また、ワークショップを通して、生徒たちがフレスコ画の作品に込められた画家の思いや制作の苦労を感じ取り、作品の鑑賞を深められるよう試みた。生徒と地域ボランティアが交流しながら「永遠に残したい鳴門の海」をテーマに地域を巡りながらスケッチし、フレスコ画を制作することで、アートを通じてあらためて地域の環境と向き合える場を提供する。

②事業概要

当館の特色あるフレスコ画の展示を活かして、中学生を対象に館内でフレスコ画を鑑賞し、実際に描く体験をすることができるワークショップを、中学校の教員、専門家と共に研究・開発した。ワークショップでは、生徒が館内のフレスコ画を鑑賞した後、ボランティアと共に「永遠に残したい鳴門の海」をテーマにしたフレスコ画を制作。作品を完成させた後、再び館内のフレスコ画の展示を鑑賞した。ワークショップ終了後には、生徒が描いたフレスコ画を館内に展示し、生徒作品と館内のフレスコ画展示作品を中心とした鑑賞教育を、参加中学校の希望校を対象に実施した。

・ボランティア研修・フレスコ画試作 9月13日(日)

フレスコ画を実際に体験できる研修会とフレスコ画の試作を行なった。

・第1回ワークショップ 10月11日(日)

フレスコについて学び、フレスコ画を再現した展示の鑑賞活動を行う。鳴門の海の風景をスケッチした後、館内へ戻り採取した鳴門の砂を使ってF4サイズのフレスコ画の下地を制作した。

・第2回ワークショップ 11月15日(日)

第1回ワークショップで制作した下地に上塗りをし、フレスコ画を描く。作品を制作した後、改めて館内のフレスコ画の展示を見に行き鑑賞を深めた。

・フレスコ画作品館内展示 2009年12月1日(火)～2010年1月31日(日)

館内に完成した生徒作品を展示し、鳴門市内中学生と一般来館者にフレスコ画を鑑賞していただいた。

3. 事業実績

(1) 事業の内容及び日程

◆ボランティア研修・フレスコ画試作（平成21年9月13日 10:00～16:00）

ワークショップをサポートするボランティアと引率教員17名を対象に研修会を行なう。ボランティアが事前にフレスコ画制作を体験することで、生徒をどのようにサポートしていけば良いかを共に検討していった。また、フレスコ画制作を生徒の活動とほぼ同じ手順で行なうことで制作上の改善点を見つけ、本番の手順に反映させていった。

◆第1回ワークショップ（平成21年10月11日 10:00～15:30）

地元中学校6校からの中学生34名（欠席2名）と、研究・開発メンバー、引率教員、ボランティア、美術館スタッフ19名で第1回ワークショップを実施した。

1) フレスコ画について学習

フレスコ画は漆喰が乾かないうちに描く手法であり他の画法と違い顔料を水に溶いて描くなど、専門家と一緒にフレスコ画について学んだ。

2) フレスコ画を美術館で鑑賞

美術館スタッフの案内により、フレスコ画を再現した作品を中心に鑑賞した。

3) 屋外で鳴門の風景をスケッチ

永遠に残したい鳴門の美しい海を描く為、画板や画材を持って外へ出かけ、国立公園内から見える風景をスケッチした（写真1）。

4) フレスコ画下地作り

制作手順のデモンストレーション後、2人1組で協力し、

ボランティアのサポートを受けながら、下地作りを行う（写真2）。砂と石灰を1:2の割合で混ぜ水を少しずつ入れながら漆喰を作り、土台に1cmの厚さに塗って乾かした。



写真1：鳴門の海をスケッチ



写真2：下地の制作風景

◆第2回ワークショップ（平成21年11月15日 10:00～15:30）

地元中学校6校からの中学生22名（新型インフルエンザの為14名欠席）と、ボランティア、引率教員、美術館スタッフ17名で、第2回ワークショップを実施した。

1) 上塗り

砂と石灰を1:3の割合で混ぜ、水を少しずつ入れながら漆喰を作り、乾いた下地の上に塗り重ねる。土台の縁の高さまで平らな面になるよう塗り込める。

2) フレスコ画描画

スケッチした作品をもとに、上塗りが乾かない内に水で溶いた顔料で描写した。

3) フレスコ画を再び鑑賞

館内のフレスコ画を再び鑑賞し、最初に見たときの印象と比較した（写真3）。



写真3：鑑賞風景

◆フレスコ画作品館内展示（平成21年12月1日～平成22年1月31日）

完成した作品を館内に展示し、鳴門市内中学校（3校）一般来館者に鑑賞していただいた。

(2) 参加者の数

参加人数 36 人

地元鳴門市5校と鳴門教育大学附属中学校から応募した中学生

(3) 事業により作成した印刷物等

○チラシ

『平成21年度文化庁 美術館・博物館活動基盤整備支援事業 フレスコワークショップ
永遠に残したい鳴門の海を伝統のフレスコ画法で描く』参加者募集

枚数：2. 400枚

○報告書

『平成21年度文化庁 美術館・博物館活動基盤整備支援事業 永遠に残したい鳴門の海
を伝統のフレスコ画法で描く 報告書』

発行：大塚国際美術館 2010年2月発行 部数：260部

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

・朝日新聞 徳島版 平成21年11月21日

朝刊「永遠に残す鳴門の風景」

フレスコ画に中学生挑戦



・徳島新聞 平成21年11月23日 朝刊 「閑話小話 フレスコ画の体験」

○関連誌等

・広報誌『広報なると』 12月 No. 704

「永遠に残したい鳴門の海を描く 大塚国際美術館フレスコワークショップ」



プレスコ園に植樹する小中学生



4. 事業の成果及び今後の課題

参加した中学生のアンケートには、「フレスコ画を最初見た時はきれいだなぁとしか思っていなかったけど、自分が体験してみて1つの絵を描く大変さがとてもよく分かった。色々な絵の鑑賞をもっとしてみたい」「描き方について深く考えられるようになった」「何年ももつ絵がつかれるなんてすごくいい体験ができた」との意見が寄せられた。また、引率教員からは「学校ではできない経験を生徒たちとともに楽しむことができました。またこんな企画があればぜひ参加したいと思いました」「これからも中学生向けのワークショップを開いてほしい」との意見があった。サポートしたボランティアからは「より作品が身近に感じられた」「初めての経験が出来て楽しくて本当によかった」などボランティア自身も楽しんで参加していた。



完成作品の様子（一部）

中学生が美術館でフレスコ画を鑑賞し、フレスコ画法を体験するワークショップは、学校現場では体験することが難しいアプローチである。本事業によって、作品鑑賞の場である美術館でフレスコ画を制作するワークショップを研究・開発することが出来た。

フレスコ画の制作方法を検討する段階で、身近な素材である地元の砂や藍が応用可能であることが分かり材料として取り入れる。画法に挑戦する生徒にとって親しみある素材を使う創意工夫により、さらにフレスコ画の存在を身近なものと感じてもらえるきっかけとなった。また、漆喰が乾かない内に描ききらなければならない、乾燥すると色が変わる、など試行錯誤が必要な体験をボランティアと生徒が共有することで制作の苦労を実感し、よりフレスコ画の鑑賞を深める糸口となった。制作を終え、再び館内のフレスコ画の作品を鑑賞すると生徒の鑑賞の視点に変化が見られた。体験を通し、生徒が描かれた作品の様子だけでなく、絵を描く画家の息づかいまで感じる様子が見受けられた。

本事業ではフレスコ画のテーマを「永遠に残したい鳴門の海」とし、地元鳴門の風景をスケッチして2000年超えても色あせずに残るフレスコ画を描くことで、アートを通じて地域の人や自然に向き合えるワークショップとなった。

ただ、フレスコ画制作のためには細々とした準備に多くの時間や労力を必要とするため、今後はより簡単に組み立てよう手順や制作方法を改善することが課題である。

今後も本ワークショップの拡充を目指すだけでなく、中学生にアートへの興味を引き出す新たなワークショップの開発を目指していきたい。